
大乱やみてのち、残念な少女たちのふる剣

眉村みこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大乱やみてのち、残念な少女たちのふる剣

【Nコード】

N0596BA

【作者名】

眉村みこ

【あらすじ】

勇者アレスは魔王クヌプスを倒した。ヴァレンス国には平和がもたらされ、アレス自身もほっと一息、あとはふらふらゆらゆら暮らしていくだけ。そう思っていた矢先、彼の前で新たな物語が幕を開ける。魔王を倒した勇者を待ち受けていた、対魔王軍とのガチンコバトルより厄介な出来事とは！？「勇者の優雅なリタイア生活」の世界から一年前の時を描く、眉村みこ、書き手生活へのリハビリ作！ 乞わないご期待、乞う温かなご声援！ なお、このお話はこれ単体で独立独歩、がしゃこんがしゃこんと勇ましく動き回ります

ので、他の二作、「勇者の優雅なりタイア生活」「大魔王のまたい
とこ」を読んでいただく必要はありません。

第1話「ことの終わり」

終わりは新たな始まり。

そういう陳腐ちんぷな言葉をアレスは認めない。

終わりは終わり。

おしまいである。

寝物語の終わりは安らかな眠りであり、もしも、その終わりが新たな物語の始まりだったとしたら、

「良い子がいつまでも眠れなくなっちゃうよ！」

ということになってしまう。

そんなことになったらどうなるか。良い子は睡眠不足になり、ふらふらの頭で学校に出かけたせいで勉強が身につかず、落ちこぼれ、そのせいでロクに禄ろくをもらえない職にもつけず、一生貧乏生活を送ることになる。

暗黒の未来予想図である。

そんなものを断じて許すつもりはない。

そういうわけでアレスは、物語の新たな始まりというものを一切認めないつもりである。

彼はつい先日魔王を倒すという冒険をまさに成し遂げたばかりであり、自分……というよりは一生冒険をするつもりなどなかった。

アレスは平和主義者である。

本来の彼には冒険心など微塵みじんもなく、家の縁側で日がな日向ぼっこをしながら、可愛いあの子と寄り添っていられば幸せということなんとも気だるい男子である。十四歳。

それがひょんなことから、「勇者」などという役を務めることになり、「魔王」とやらを倒した。むろんのことアレスは、英雄物語で言うところの光り輝く「勇者」ではないし、敵もなにやら毒々しい感じのあの「魔王」などではない。「魔王」とは、畏れ多くもここヴァレンス王国で反乱の旗を掲げたクヌプスという男への蔑称べっしょうで

あり、それを倒す役をアレスが担ったことから、

「『魔王』を倒すのは『勇者』じゃね？」

というお軽い市民的ノリから、つけられた呼称が「勇者」だった。「勇者」アレスが「魔王」クヌプスを倒したのが、一週間ほど前のことである。

魔王の居城であるところのスタフォロン城を落とした。

魔王軍はそのほとんどが、ヴァレンス王都ルゼリアへと出陣しており、スタフォロンにはわずかな敵兵しか残っていなかった。ここに魔王も留まっていた。理由は明らかではない。

勇者を中心とした少数精鋭メンバーは、首尾よく城門を突破し、中庭から回廊へと驀進し、最終的に王の間——クヌプスは王ではないのでこの呼称は正確ではないが、便宜的にそう言うておく——へと至った。

魔王クヌプスは、魔法の達人であり、一騎当千の猛者である。いつかのヴァレンス軍との戦では、自ら陣頭に立ち、その強力無比な呪文で、大いにヴァレンス軍兵士の肝に冷や汗をかかせた。永久に冷や汗をかけなくなった状態になった兵士の数も百をくだらない。

そんな猛将相手に数を用意しても仕方ないし、王都ルゼリアへの防衛に兵を割かなければならず、もともと数もいなかったしで、勇者パーティは五人で魔王に立ち向かった。五はヴァレンスにおける聖なる数である。

「五対一だってよくよく考えれば卑怯じゃねえか」

と考える向きもあるが、さにあらず、魔王にも従者が数名つき従っており、数的な優位性は、アレス達にはなかった。

始まる死闘。

対魔王バトルは激戦を極めた。

勇者パーティは知恵と力の限りを尽くして戦った。

そうしてどうにかこうにか勝利をおさめたものの、アレス達の傷も深かった。仲間から死人こそ出さなかったがほとんど死に瀕した者もあり、もちろんそれでも魔王相手である、僥倖ぜいしやうと言うべきだろ

うが、苦しみの声を上げる仲間を見ながらそういうお気楽な考え方ができるほどアレスはクールではなかった。

「オレはアツい男だからな」

アレスは誰にともなくつぶやく。

なにはともあれ、魔王は倒した。

反乱は治まり、一件落着。

落着はしたのだけれど、ただ、この反乱を収めたことに関して歴史的評価がどう下されるか、それはアレスには分らない。というのも、今回の反乱というのは、民衆による王制打倒という趣が如実にあったからだ。王とその腰巾着の貴族という特権階級への下からの抵抗。もしかしたらこれは成功させてやる方が良いのかもしれない、とアレスも実は反乱収め中に思わないでもなかったけれど、彼の置かれた立場がその思いを少しでも行動へと移すことを許さなかった。

事は終わった。終わったのである。終わったことをどうこう言っても始まらない、という潔い諦めを抱けるほどにはアレスは大人だった。大人でなければ、一団のリーダーなど務まらない。

事は終わった。

魔王を倒したのち、王都を攻めていた反乱軍が蜘蛛の子を散らすように撤退したのはすぐのことだった。魔王クヌプスはカリスマ的なリーダーであり、これを欠いてまとまりを持てるほどの精神的強さは反乱軍には無かったのである。

全てが終わったのだった。

終わりは新たな始まり。

くどいようだが、アレスはその言葉を認めない。

ただし、アレスがある言葉を認めないからといって、その言葉通りのことが起こらないのかというと、もちろん、そんなことはないのである。

第2話「開幕ベル静かに」

アレスは今のんびりと石畳の街道の上、馬車を走らせている。

空はどこまでも高く高く、青く澄み渡って雲のかけらさえ無い。

バーサス魔王戦というラストバトルから一週間が経過していた。

傷ついた仲間の看病をするためと王都を攻めていたクヌプス軍の動向を見守るため、この一週間はスタフォロン城内に滞在していた。

そこへ王都帰還の命が王より下されたのである。と言っても、王は現在病床にあり、代わって政務を執^とっているのは王女であるので、実質的にはその王女からの命であるが。

「帰って来てください」

その命は、速やかに反乱收拾の第一功労者を賞し反乱の終結を宣言することによって、国の体裁^{ていさい}を良くするのが目的である。

仲間のなかにはまだ満足に動けない者もある。王女からの帰還の命はできるようなであれば全員、難しいようであれば勇者一人でもというものだったので、アレスは、傷ついた仲間とその看護のメンバー、すなわち自分以外の全員を残し、一人スタフォロンを出た。残していく仲間に残る髪を引かれる思いのアレスであったが、王女の命を無下にするわけにはいかなかった。

「ああ、ひとりはいやだなあ。みんなと一緒にだったらどんなにいいか……」

御者台の上で、アレスは呟きをもらした。

枯れて落ちそうになった葉のついた枝をさわさわーと揺らす秋風のような、いかにもさびしげな声である。

それはただ今の好天にまったく似つかわしくなかった。

すると、

「ひとりとはどういうことだ。わたしは数に入れられていないのか？」

すぐ隣から、呆れたような声が上がる。

アレスは隣を見たりしなかった。それが目の保養となるような美少女でもあれば話は別だけれど、二十歳がらみの男を見たってしょうがない。なので、前を見ながらぞんざいに答えた。「うん」と「つれないな。これから長い旅を続けることになるというのに。ある意味では伴侶と言ってもいい存在であるのに」

隣からの声は微笑を含んでいる。

「気色悪いこと言うなよ」とアレスは応戦した。「オレが伴侶にしたいのは、感じのいい優しい女の子だ」

「当てがあるのか？」

「ない、全く」

アレスはきっぱりと言った。しかし、そのあとに、

「でも、オレみたいがいい男にはそういう子が見つかるはず！
と、これもきっぱりと言い切った。

「一カ月お前と付き合って得たわたしの勘によると、お前にはどうもそういう子は見つからないような気がする。アレス」

「ええっ！」

アレスはびっくりして、隣を見た。

豊かな銀髪を無駄に日の光にぴかぴかと輝かせた青年が口の端^はを少し上げている。

「前を見て運転しろ。アレス」

「えー、なんだよ、ズーマ。お前、もしかして、そういう能力があるの？」

アレスは言われるまでもなく進行方向に視線を戻しながら、訊いた。

「そういう能力とは？」

「予知能力的な」

「勘だと言っただろう」

「勘か……変な勘を持つなよ！」

「変と言われてもそう感じたのだから仕方あるまい」

「じゃあ、その勘で、オレにはどうという女の子が見つかりそうだった。」

て感じたわけ？」

「ふむ」

ズーマは意味ありげに沈黙考した。

街道脇にそっとたたずむ白い花が、そよ風に楽しそうに揺れている。

「厄介な女の子が見つかるな」

「厄介？」

「ああ」

「『厄介』ってどんなんだよ」

「トラブルメーカーだな。トラブルにお前を巻き込む素敵極まる女の子だ」

「どこがステキ！？　トラブルなんて御免だね。オレはまったり暮らしたい」

「それではわたしが面白くない」

「オレはお前を楽しませることまでは約束してないからな」

「なるほど、確かに。しかし、結局はそうなるだろう。わたしの勘は良く当たる」

ズーマは低い声で言った。

次の瞬間、突然びゅうっという強い風が吹いて、アレスの黒髪をはちゃめちゃにした。

アレスは、手ぐしで髪をなでつけながら、不気味そうに隣の青年を見た。

「嫌な風だったな、アレス。何か起こりそうだ」

ズーマがすかさず言う。

「なにを、何かの前振りみたいなセリフ言ってんだよ！　新たな魔王とか、そういうの要らないからね！」

「魔王で済めばいいがな」

「魔王より厄介ってどんなんだよ」

「そんなものはいくらでもあるがな。単に殺し合いをすればいいだけの問題など実取るに足らないものだ」

「オレとみんながこの半年やってきたことを過小評価するなよな！」
そうツツコミはしたものの、アレスはズーマが言ったことを心底では認めていた。この世には、もっと厄介なことが色々とあるのである。十四年しか生きていないアレスでも、すでに一つ二つはそういうものを経験済みだった。

そうして、そんなアレスの前に、魔王バトル以上の厄介事を経験するチャンスが、再びか三度かは分らないが、今まさに迫りつつあった。

「前から馬が来るようだな」
ズーマが言う。

なるほど、彼の言うとおり、前方からひとつの馬影が近づきつつあった。もちろん、馬がひとり（一頭）で気ままにお散歩しているわけではなく、騎乗している人がある。軽快に疾駆してくる様子から、乗り手の中々の腕であることが分かる。

アレスは馬車を停めた。

第3話「再会の仲間」

アレスが馬車にブレーキをかけたのは、感じたからである。
なにやら怪しげな鬼気とでも言うべきものを、前から来る人馬から。

それに備えるために、馬車を止めた。

魔王戦が終わりハッピーエンディングを迎えたからといって、勇者アレスの心に油断は無い。遠足は、家に帰るまでが遠足である。せつかく魔王を倒したのに、それに浮かれて帰りの道中で石にでもけつまずいて頭を打って大地に還ってしまったらしたら、目も当てられない。まだキュートな女の子といちゃいちゃもしてないのに！「家に帰るまでオレは油断しないし、絶対に可愛い子と知り合ってみせる！」

アレスは心をあらたにして、馬が近づくのを待った。

案の定である。

馬はアレス達の少し手前で止まった。

鹿毛かげの美しい馬だったが、その乗り手はさらに美しかった。

アレスと同じ年ほどの少女である。

馬から降りてアレス達に近づいてきた彼女は、すらりとした肢体と烈火のような赤い髪、薔薇色に上気させた頬を惜しげなく日の下にさらしていた。少女は、土色の旅装であったが、まるで沐浴直後でもあるかのような清新さの中にあった。

少女が立ち止まる。

アレスは、彼女の翡翠色に輝く目をじっと見つめた。すでに御者台から地面に降りている。御者台に座ったままでは変に応ずることができないからだ。そうして、アレスの手には剣が握られていた。もちろん、鞆におさめられた状態である。勇者たるもの、いきなり抜き身の剣で人に向かうような酒場のチンピラ然としたチキンぶりを見せつけるわけにはいかない。その剣の他に、マントをはおった

アレスの背には、もうひと振り剣がある。

「さて、見知った顔だが、ここまでわざわざ出迎えに来てくれた様子でもなさそうだな」

御者台を降りてアレスの隣に立っていたズーマが、面白そうな声を出す。

少女は知り合いだった。単なる知り合いというだけではなく、この反乱を共に戦った仲間である。ラストバトルには参加しなかったけれど、今回の戦いを力合わせて乗り切った一人。名はコウコ。

「今は王都にいるはずだけどな」

そうつぶやいたアレスは、この反乱中に何度も嗅いだにおいを感じて、顔をしかめた。

そうして、すぐにでも剣を抜きたくなった。もうチキンがどうこうとか勇者の名誉に関する話などどうでもいい気分である。

というのもアレスがかいだにおいとは、腐臭——血と肉、すなわち死の臭いだったからだ。

仲間の少女と会って、なぜそんな臭いが漂ってくるのか。日なたの匂いとか、花の香りとかならともかく。訳が分からないアレスだったが、その訳のわからなさに向かい合えるだけの意志の強さを備えている。

ただし、もちろん、一緒に向かい合ってくれる者がいれば、それに越したことはない。

隣にいたズーマがすすすつと離れようとしたところを、アレスは逃さなかった。

「なにをする？」とズーマ。

「それはこっちのセリフだ。どこに行くつもりだよ」

アレスは、まるで人見知りの子どもがお母さんにするように、ズーマの服の裾をしっかりと手で握っていた。

ズーマがアレスの手を引き放そうとしながら言う。

「離れて見物しようと思ったただけだ」

「オレたち一心同体だろ」

「いや、二心異体だ。放せ。せっかく面白い見物になりそうなのだ」
「誰が放すか!？」 見物役になんかせねー!! 絶対にお前も巻き込んでやる!」

アレスとズーマがごちゃごちゃやっているのを、少女は冷えた目で見ていた。

アホくさいかけあいをしている最中にも、アレスに油断はない。いや、むしろ、相手の油断を誘おうという意図を若干は持っていることを、彼の名誉のために付記しておく。アレスは注意深く少女の一挙手一投足を心の目でじっと見つめていた。そんなことをするくらいなら、相棒としゃべくるのをやめて肉眼で見ればいいのという批判もあることだろうが、その批判は正当であると言わざるを得ない。

アレスとズーマはしばらくの間ぐだぐだとやっていたが、やがてアレスの手はズーマの服から離れた。

ズーマはすかさず一声放った。

その言葉は、今はもう日常生活には使われていない古い古いものである。

声と同時に、ズーマの体はふわりと宙にいた。そのまま、すーっと馬車の屋根まで浮かんで行ったズーマは、屋根に腰を落ち着かせた。魔法である。それから長い脚を組んで、アレスと少女見下ろした。まさに高見の見物である。

アレスはその様子をうらめしげに見上げてから、そろりと少女の方に目を向けた。どうやら彼女にはひとりで対するしかないらしい。アレスは覚悟を決めると、一つこほんと咳払いをしてから、

「よ、コウコ! お久ー!」

快活な声と手を上げた。

それは、なにやら薄暗い雰囲気吹き飛ばそうとするためにことさらに為したもので、わざとらしいことこの上なかった。

少女は無言で、右手を左腰のあたりに差し入れた。

まるで髪を直すかのような自然な仕草である。

するりと、少女の手が出現させたのは、見事な白刃だった。

第4話「兎を狩る獵犬を狩る者」

刃を持った立ち姿は、まるで芝居のキメポーズのように綺麗だった。

そうして、芝居だとしたらこれから悪人がばっさばっさと斬られてしまう見せ場となるわけだが、現実に関自分でそういう悪人役を演じたくないアレスは、念のため一步下がることにした。

一步下がったって別に悪いことはない。そうしたところで、彼女との距離は十分に声が届くほどの近さであることだし。念には念を入れて、アレスはさらにもう一步下がっておくことにした。用心のためである。虚勢を張るのは匹夫の勇。勇者の勇とは細心の上に成り立つものなのだ。

「魔王を相手にして一步も引かなかった勇者が二歩下がる」

頭上からかうような声が降ってきたが、それに応じている時ではない。相手はすでにこちらへの害意で満ち満ちているのである。刀の先を向ける友好の挨拶などというのがあれば話は別であるが。

「で、どういふつもりだよ、コウコ？」

アレスは、問い質した。彼女は仲間である。まずは訊くべきだろう。仲間に剣を向けられても仕方ないような背徳的行為をした覚えはない。

「そりゃあさー、ちょっとはいやらしい目で見たりとかしたときがあったかも知れど、仕方ないだろ！ オレは男なんだから！」

アレスの冗談に、少女は全く反応しなかった。

アレスは無駄だと分かっているにも冗談をやらすには済まないこの素敵に残念な性格を愛してくれる女の子がいつか現れないだろうかともやもや考えたあと、いたらいたでそれもなんだかなあ、と思っ
てしまつて精神の袋小路に迷い込み、テンションを下げた。

「恨みは無いわ」

少女の声は風に鳴る風鈴のように清爽としていたが、

「けれど、お前をルゼリアに帰すわけにはいかない。ここで死んでもらう」

口にした内容はさわやかさとは対極にあるものだった。

少女の足が地を蹴る。

アレスは二歩下がっていた自分の用心深さを心の底から称賛した。そのおかげで、抜刀して相手の刀を弾くまでの時間が十分にあった。ぎいん、と鋼が撃ち合わされる音が空気を揺らす。

「どういうつもりだよ、コウコ！」

十字に重なった剣と剣越しに、アレスは少女の目をにらんで言った。

少女は艶のある口元を静かに開くと、

「ヴァレンスのためだよ」

それだけ言って、つばぜり合いをしたまま力任せにアレスの体を押した。

押し負けることは分かっている。

同じくらしい体格の女の子に力で負けるというのは悔しいことこの上ないが、そんな安いプライドにこだわっていると、高い命を失うことになるのが目に見えているので、アレスは押された反動を利用して、自分から後ろに跳んだ。

そこへ、風を巻いて少女が迫る。

振られる刀。神速と言ってよい動きだが、アレスは反応している。肩口に横なぎに襲いくるそれを自分の剣で受け止める。少女の細腕のどこにそんな力があるのかさっぱり分からないが、とにかく重たい、重すぎる一撃である。以前、陸上で最強の獣であるリーグルと戦ったときにその前肢の一撃を剣越しに受けたことがあったが、それと大差ない。そう言ったらさすがに言い過ぎではあるけれど、それほど過ぎもしないような気がするアレス。

少女というよりは、もはや可憐な容姿をまとった化け物である。つまり外見と内面が全然別物。

不安定な体勢で一撃を受けたアレスは、力を受けきることができ

ず横に飛ばされた。ごろごろと地面を転がされたが、頭は冷えている。すぐに立ち上がると、追撃は無い。代わりに、真正面にコウコの姿。彼女は、長剣を構えたまま端然としている。よくよくと見れば剣は反りのある片刃。こちらはアレスからは見えないが、その刃には炎のような紋様が浮いていた。

――ヴァレンスの……何だって？

アレスは少しできた間まに考えた。

確かヴァレンスのためだと言っていた。しかし、まさにそのヴァレンスのために、アレスはこれまで働いてきたのだった。もちろん、ヴァレンスとはこの場合、ヴァレンス王や貴族のことを指しているわけだけれど。

実際はアレスはそういうヴァレンスの支配者階級のために働いていたわけではなく、もっと個人的な目的で動いていたわけなのだけれど、しかし、彼の働きが客観的にヴァレンスのためになったことは誰にも否定できるところではない。

「それなのに何で殺されなきゃいけないんだよ！」

アレスは憤然とした声で言った。

しかし、心は水のように澄んでいる。このくらいで取り乱すようなヤワな人生は送っていないのだ。

「ずるがしこいウサギがいなくなると、それを狩る猟犬は必要がなくなる」

言ったのは、コウコではない。ズーマだった。

アレスは、ふうと息をついた。

ずるがしこいウサギ（魔王）がいなくなったので、それを狩る猟犬（勇者）は必要がない。必要が無いものを生かしておくのは無駄である。無駄は排除するに限る。そういう分かりやすい理屈。実にシンプル！

アレスは納得した。

納得せざるを得ない筋道。

納得はしたけれど、アレスがすっかりした気持ちにならなかった

ことは言うまでもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0596ba/>

大乱やみてのち、残念な少女たちのふる剣

2012年1月4日13時50分発行